

地位の真理

この学び全体のアウトラインと本日の内容

1. イントロダクション (総論 七つの項目)
2. 各論 33 の事柄
3. 結論

6 月から 8 月までに、イントロダクションと各論の第 10「聖霊の初穂（初なりの実）をいただいた者である」までを学びました。本日は、第一に、各論の第 11「神の永遠の計画の中にある者である」を扱います。そして、その内容は神の選びですので、第二に、「救いにおける神の選びと人の自由意思との関係」について、フルクテンバウム博士の別の著書「神の意思と人の意思、救いにおける神の選びと人の自由意思」から補足説明します。

前回までの内容の確認

イントロダクション 総論 七つの項目

1. キーワードは「キリストにあって」
2. 信者が持つ地位と実際の生活との関係
 - (1) 信者が持つ地位（メシアの中にあるという地位）と、それにつながる 33 の事柄は、神の目から信者を見たときの真実である。
 - (2) 信者の実際の生活を人間の目から見ると、そういう地位にあるようには見えない。
 - (3) 信者の人生における歩みを、信者の持つその地位にふさわしいものにしていくこと、これは聖霊の働き「聖化」である。
 - (4) サタンや悪霊との戦いにおいては、信者の実際の生活がどうあるかではなく、メシアの中にある地位とそれに伴う権威によって対抗する必要がある。
3. その地位につくための経路は、聖霊のバプテスマである（I コリ 12 : 13）。
4. その地位が与えられた源は、神の恵みである（エペソ 1 : 6、2 : 7）
5. その地位は、信者の権威の基盤である（エペソ 1 : 18～19）
6. その地位に伴う権威を行使することは、サタンに対する最良の防御である。
7. 「キリストにあって」というキーワードと並んで、メシアと信者との関係を教える重要な表現「キリストと共に」・・・神の目から見たとき、信者はメシアと同一の者と見られている。十字架からスタートして全部で 8 つの展開【キリストと共に、十字架につけられた・死んだ・葬られた・生かされた・復活させられた・苦しんでいる・栄光を受けるであろう・共同相続人となるであろう】。そのすべてが、救いの結果である。神の恵みであって、人の働きではない。

各論 33の事柄

1. 神によって贖われた者である
2. 神と和解させられた者である
3. 神の怒りはなだめられており、神は私に怒ってはおられない
4. 神から赦しを受けている者である
5. 神から義と認められた者である
6. 神からの栄光を受ける者である
7. 闇の支配から解放された者である
8. 心の割礼（キリストの割礼）を受けた者である
9. 神に受け入れられる者である
10. 聖霊の初穂（初なりの実）をいただいた者である

本日の第一テーマ 各論 第11 「神の永遠の計画の中にある者である」

11. 神の永遠の計画の中にある者である
 - (1) IIテモテ 1:9 神は私たちを救い、・・・ご自身の計画と恵みとによる信者は、神の永遠の計画の中にあり、またその計画の一部である。
 - (2) 5つの基本的用語
 - ① 予知 (ギ)プロギノースコー 予め知る)
 - ロマ 8:29 神は、あらかじめ知っておられる人々を・・・
 - Iペテ 1:2 父なる神の予知に従い、・・・
 - ② 予定 (ギ)プロオリゾー 予め定める)
 - ロマ 8:30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、・・・
 - エペ 1:5、11 神は、・・・あらかじめ定めておられた
 - ③ 選ばれた者 (ギ)エクレクトース)
 - ロマ 8:33 神に選ばれた人々
 - コロ 3:12 神に選ばれた者
 - IIテモ 2:10 神に選ばれた人たち
 - テト 1:1 神に選ばれた人々
 - ④ 選び (ギ)エクレゴーマイ、ハイレオーマイ 選ぶ)
 - エペ 1:4 神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び
 - IIテサ 2:13 神は、御霊による聖めと、真理による信仰によって、あなたを、初めから救いにお選びになった
 - ◆ 「御霊による聖めと、真理による信仰によって」とは・・・
 - 御霊がその人をこの世から分かち、真理のみことばを与える
 - 人は御霊の導きと証しを受け入れ、みことばを信じる

⑤ 召し (ギ)カレオー 呼び出す、召す)

- ロマ 8 : 30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、・・・
- ロマ 9 : 24 神は、私たちを、・・・召してくださった
- I テサ 5 : 24 あなたがたを召された方は真実ですから・・・
- II テサ 2 : 14 神は、私たちの福音によってあなたがたを召し・・・
- II テモ 1 : 9 神は私たちを・・・聖なる招きをもって召してくださった

本日の第二テーマ 救いにおける神の選びと人の自由意思

1. メシアは、すべての人の罪を贖うために死なれた
 - (1) イスラエルのため (イザ 53 : 8、ヨハ 11 : 51、使徒 13 : 23、ガラ 2 : 20)
 - (2) 信者のため (マタ 20 : 28、26 : 28、ヨハ 10 : 15、15 : 13、17 : 2～24、使徒 20 : 28、ロマ 4 : 25、ガラ 3 : 13、エペ 1 : 3～7、エペ 5 : 25～27、ヘブ 9 : 28、黙 13 : 6～8)
 - (3) 世全体のため (ヨハ 1 : 29、3 : 16～17、4 : 42、6 : 32～51、II コリ 5 : 19、I ヨハ 2 : 2、4 : 14)
 - (4) すべての人のため (ルカ 19 : 10「失われた人(たち)」、ロマ 5 : 6「不敬虔な者(神なき者たち)」、ロマ 5 : 6～8 と I テモ 1 : 15「罪人を救うため」、II コリ 5 : 14～15、I テモ 2 : 4～6、4 : 10、テト 2 : 11、ヘブ 2 : 9、II ペテ 3 : 9)
 - (5) 救いに関係する 3 つの用語のいずれもが、不信者にも使われる
 - ① 贖い・・・偽預言者や偽教師にも II ペテ 2 : 1
 - ② なだめの供え物・・・I ヨハ 2 : 2
 - ③ 和解・・・II コリ 5 : 18～20、コロ 1 : 20
2. 神は、すべての人を招いておられる (マタ 11 : 28、22 : 14、マコ 16 : 15、ヨハ 7 : 37、黙 22 : 17)
3. 新約時代において人が救われるためには、主イエスを信じるのが条件 ((使徒 16 : 30～35)
 - (1) 30～32 節 ピリピの町の看守は収監されていたパウロとシラスに尋ねた。「救われるためには、何をしなければなりませんか」。ふたりは答えた。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」。そして、ふたりは、彼とその家の者全部に主のことばを語った。
 - (2) 33～34 節 看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、むち打ちで受けた傷を洗って手当をした。そして、そのあとですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。
 - (3) 35 節 これらの出来事はすべて、夜明けまでの間に起きた。

4. 信じることは、人の行いではない (エペソ 2:8~9)

- (1) 看守は「何をしなければなりませんか」と尋ねたが、「信じる」ということは人の行いではない。聖書は、信仰と行いとを明確に分けている。
- (2) エペソ 2:8a「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」と訳されているが、原文を直訳すると、「あなたがたは、恵みによって、信仰を通して救われたのです」
- (3) 「信仰によって」と訳すと、「信仰を用いて」というような意味に誤解される。聖書は、信じることは、行いとは別のものと教えている。エペソ 2:8b~9a は続く。「それは (救いは)、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません」。
- (4) 信じることには、二つの段階がある (申 30:2)
 - ① 神に背を向けていた自分を神の方に向きを変える
 - ☐ シュアップ「立ち返る」(申 30:2) 出発点にまで戻る必要はない
 - 自分の立ち位置は何も変わらない。何か善行をひとつでもするわけではない。きよいことは何ひとつできない自分のありのまま、そのまま神の方を向く。行いを改めて善いことをすることではない。
 - ピリピの看守は「救われるためには、何をしなければなりませんか」と尋ねたときに、神の方に向きを変えていた。
 - ② 神のことばに耳を傾け、理性を働かせて、神の約束を受け取る
 - ☐ シャウマー「理性をもって聞く」(申 30:2、6:4)
 - 神は愛をもって、私たちに救いの道を備えてくださっている。そのことを教える神のことばを聞き、理解してそれを受け取る。盲信ではない。
 - ピリピの看守は、パウロとシラスが語る主のことばを聞いて、それを真実であると受け入れた。彼はこのとき、神の約束を受け取った。
 - ③ 信じる = 「神の方に向きを変え、神のことばを聞いて神の約束を受け取る」
= ☐ メタノエオー「考えを変える」→訳語「悔い改める」(マタイ 3:2)
- (5) 救いは、神からの「賜物」(エペソ 2:8) である。もし、人の行いによるなら、それは報酬 (ロマ 6:23)。しかし、救いは報酬ではなく、神からのプレゼント。私には何の功績も働きもないのに、神が私を愛してくださり、受け入れてくださり、神の国に迎え、永遠のいのちをくださる。これを「恵み」(エペソ 2:8) という。

救いは、信仰を通して、恵みによる

5. なぜ、神は、人の行いや人の長所によらず、恵みにより、信じることを通して、救いを与えてくださるのか。エペソ 2 : 9b は続く。「だれも誇ることのないためです」。
 - (1) 誇りは、罪の源 (エゼ 28 : 17、イザヤ 14 : 14、創 3 : 5)
 - (2) 神の国は、自分を低くする者たちの国 (マタイ 18 : 3)
 - (3) 自分を誇る人は、神を尋ね求めない (詩 10 : 2~6)
6. 生まれながらの人はすべて、神を求めようとしなない (ロマ 3 : 11)。よって、誰かが宣べ伝えることが必要 (ロマ 10 : 9~15)。
7. しかし、聴くすべての人がピリピの看守のように主のことばを受け入れるのか。ロマ 10 : 16、そうではない。人は自由意思を持っていて、拒む人と受け入れる人がいる。
8. そもそも神を求めようとしなない人の中に、どうして受け入れる人がでるのか。ロマ 10 : 17 「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことば (直訳すると「キリストのことば」) によるのです。」
 - (1) ギリシア語の「ことば」・・・ロゴスとレーマ。ロゴスは言語、レーマは実際に語られたことば、発音されたことば。この箇所でのキリストの「ことば」は、キリストの「レーマ」
 - (2) 人が宣教し、他の人がそれを聞く。そのとき、子なる神、キリストが聞く人すべての心の中に語っておられる (ロマ 10 : 18、マルコ 16 : 20)
 - (3) 聖霊なる神は、そのとき、罪とは、さばきとは、義とはどういうことか、聞く人の心に教えてくださる (ヨハ 16 : 8)
9. 神の働きかけはさらに続く。ロマ 11 : 7 「選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです」。
 - (1) 神のことばを聞く人たちは、受け入れる人と拒む人に分かれる。人の側から見れば、人が自由意思で判断した結果である。同時に神の目からみると、受けいれた人は神が恵みをもって選んでいた人、拒んだ人は、かたくなにされた人。
 - (2) 神の選びは、選ばれた人の行いや長所にはよらない (ロマ 11 : 5~6)
 - (3) 人の目から誰が選ばれているかどうかはわからない。宣教は、すべての人に向けて行わねばならない。また、前項の 2 番と 9 番にあるように、神もまたすべての人に語りかけてくださる。
 - (4) 神のことばを聞くとき、選ばれている人には、さらに神の働きかけがある。聖書ではこれを「召す」(ロマ 8 : 30) という。平たく言えば「呼び出す」。教会というのは、原語を直訳すると「召し出された者たちの集会」。
 - (5) 信者を指す用語は、「選ばれた者」(コロ 3 : 12、Ⅱテモ 2 : 10、テト 1 : 1、Ⅰペテ 1 : 1)。「キリスト者 (クリスチャン)」(使徒 11 : 26) というのは、教会の外部的な人たちが、信者を指して言ったことばで、「何かというとキリスト、キリストという連中」という意味。

- (6) 神の召しは、強制連行ではない。神が私を特別に呼び出してくださる、それに私は自分の自由意思を働かせて応答し、呼び出しに応じるという関係。
- (7) 神の選びは、恵みの選び（ロマ 11：5）であって、私に何か資格や長所が認められたからではない。そして、私が自分の自由意思を働かせて神を信じるようになったといっても、神の選びと召しがあったからこそだとわかると、ますます自分には誇ることは何もない、とわかる。
10. 宣教において、神の選びと人の自由意思とは調和している（使徒 13：44～48）。
- (1) 13：46 「あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです」
- (2) 13：48 「異邦人たちは、それを聞いて喜び、主のみことばを賛美した。そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入った」
- (3) 神から召し、すなわち特別の呼び出しがあることがわかる箇所は、使徒 16：14 「主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた」
11. 誰を選ぶかどうかは、完全に神の主権の中にあることである。選びの基準について啓示されているのは、I コリ 1：26～31
- (1) この世の愚かな者、この世の弱い者を選ばれました。知恵ある者はずかしめるため、強い者はずかしめるために。(27 節)
- (2) この世の取るに足らない者や見下されている者を選ばれました。有るものをない者のようにするため、無に等しい者を選ばれました。(28 節)
- (3) これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。(29 節)
- (4) しかし、私たちは、神によってキリスト・イエスのうちにあります。キリストは私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました。まさしく、「誇る者は主を誇れ」(エレ 9：23～24)と書いてあるとおりです。(30～31 節)
- (5) エレ 9：24 「わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行う者である」。私たちは、神の選びが公正であることを信頼する。

(前回の質問)

エペソ 5：18b～21 聖霊の満たしに関連して、19 節「互いに語り」の「互いに」は原語を直訳すると「自分たち自身に」とのことですが、21 節の「互いに従いなさい」の「互いに」は別の原語が使われているのですか？

19 節 ☐ヘアウトゥ「自分自身に」 ロマ 6：11「自分を」、6：13「あなたがた自身」、ロマ 6：16「自分の身を」、II コリ 13：5「自分自身を」

21 節 ☐アレーロン「互いに」 ロマ 12：5、10、エペ 4：2、25